

第一編
明治維新以前

第一章 鎖国以前のパン

第一節 長崎とパンの由来

近代日本における食生活洋風化の発端は、いうまでもなく幕末の開港である。

大老井伊直弼が勅許を得ることなく独断でもつて日米修好通商条約に調印したのは安政五年（一八五八）六月であつたが、これにつづいて日露、日蘭、日英、日仏条約が調印せられ、翌六年（一八五九）六月一日を期して、神奈川（横浜）、長崎、箱館の三港が開港された。そしてこの三港につづいて開港された兵庫（神戸）、新潟の五港に設けられた外人居留地から、西欧パン食文化が次第に全国に拡がつていつたからである。

しかしこの国がはじめて西欧パン食文化の洗礼をうけたのは、幕末でなく戦国時代であつた。

したがつて日本におけるパンの歴史を語るためには、この戦国時代から出発しなければならぬ。

しかし戦国時代の約一世紀にわたり、ヤソ教と共に拡がりをみせた西欧パン食文化は、寛永十六年（一六三九）の鎖国によつて中絶を余儀なくされた。そのためにややひろがりを見せたパン食も衰微の一途をたどつた。こうして「パン」という名のみが長崎地方の方言として伝存されるという鎖国時代を迎えたのである。

しかし本書は「日本のパン発達史」でなくて「パンの明治百年史」であるから、明治以前のパンについては必要最少限度の言及にとどめなくてはならない。

以上の次第で明治以前のパンについてはくわしい言及をさしひかえるが、ここではまづパン食の普及基地としての役割を果たした、鎖国以前の南蛮紅毛人との交易港についてふれてみたい。

南蛮紅毛交易年譜

西暦	年号	事
一五四三年	天文二年	ポルトガル船九州種子ケ島に漂着、鉄砲を伝える
一五五〇	天文一九	ポルトガル船はじめて九州平戸に来航（南蛮交易開始）
一五五九	永祿二	大友義鎮（宗麟）豊後府中を開港、外国人の貿易を許す
一五六一	永祿四	ポルトガル船肥前横瀬浦に来航
一五六五	永祿八	ポルトガル船肥前福田浦に来航
一五六七	永祿一〇	ポルトガル船肥前長崎に来航
一五七一	元龜二	大村純忠長崎をポルトガル人に開港する
一五八四	天正一二	イスパニヤ船初めて肥前平戸に来航する
一六〇九	慶長一四	オランダの平戸貿易はじまる
一六一〇	慶長一五	徳川幕府イスパニヤ交易開始
一六一〇	〃	広東の商人来航する
一六一一	〃 一六	幕府明商に長崎貿易を許す
一六一三	〃 一八	イギリス平戸貿易を開始する
一六一六	元和二	欧船の来航を平戸、長崎に制限する
一六二三	元和九	イギリス平戸の商館を閉鎖
一六三三	寛永一〇	朱印船以外の海外渡航を禁止する
一六三五	〃 一二	朱印船を含む邦船の渡航を禁止、唐船の寄港を長崎に限る
一六三六	〃 一三	長崎に出島成りポルトガル人をここに収容する
一六三七	〃 一四	島原の乱おこる（翌年鎮圧）

一六三九	〃	一六	ポルトガル人の来航禁止、平戸蘭館破壊令を出す	
一六四〇	〃	一七		
一六四一	〃	一八		長崎来航のポルトガル人六一人を斬る
				平戸の蘭館を長崎の出島に移す(鎖国の完成)

以上が戦国時代の南蛮(ポルトガル)紅毛(その他の欧州諸国)交易に
関する略年譜であるが、いうまでもなくこの時代の中心は長崎であり、こ
れにつぐものが平戸、それから豊後の府中(いまの大分市)であつた。

従つて西洋のパン食文化はこれらの南蛮紅毛交易港からひろがつてい
たのであるが、さびしい片田舎の一漁村にすぎなかつた長崎が、ひとたび
貿易港として開港されると、非常な勢いでここに人口が集中した。

慶長時代(一五九六―一六一五)の終りごろにはこの定住人口は五万
人を突破したとあるが、当時このような大都会は全国でかぞえるほどし
なかつたものである。

しかし問題はそれよりもこの南蛮貿易の基地が、欧化風潮の横溢した文
化都市だつたことである。ここにはたいへん多くのポルトガル人や唐人た
ちが日本人と雑居していた。そしてそうした居留民たちの多くは日本の女
性を現地妻として、和洋折衷の生活をしていたようである。それにここ
には南蛮船が長いこと停泊していた為、その船員たちが町のにぎわいに拍車
をかけ、その国際色をゆたかにする役割を果していた。

鎖国後の十七世紀の中ごろにこの土地の儒医向井元升が書いた「知恥篇」
と題した本があるが、それをみると長崎の欧化風潮について次のように書
いてある。

「ある翁(おきな)語りけるはキリシタンさかむなりしときの世のあり
さま……人には南蛮名をつけて呼び、歳月時節の風儀も、冠婚葬祭の礼儀
も、賓客朋友のまじわりも、道德節義の心操も、飲食衣服の調いも、南蛮
様(よう)を用いさせ尊とませ、国家の政道をすすめ、人の成敗を沙汰し
百姓耕作のことまでさしずをなす」と。

これでもつて当時の欧化風潮の一端がよくわかるが、そんなふうだつた

から、ここでパンやビスケットや洋菓子が多く且つ深く浸透していつたこ
とに不思議はない。

明治三十八年刊の長崎市役所編「幕府時代の長崎」をみると、パンを含
む長崎名産の南蛮菓子の元祖は元和時代(一六一五―一六二四)に南蛮人
から製法の伝授をうけて商売をはじめた伊藤小七郎なる人物だつたとある
が、元和時代といへば豊臣氏が滅亡した大阪夏の陣があつたのが元和元年
であるから、長崎の開港から既に三五―四〇年後である。したがつてそれ
まで一軒もパンや洋菓子を商うものがないかつたというのも奇妙なはなし
であるが、何れにしてもパンは在留南蛮人の主食であつたし、その現地妻
たちは毎日家庭でパンを焼いていたのだから、この時代のパンはすでに決
してめづらしいものではなかつたのである。

第二節 基督教とパンの因縁

国際都市長崎がパン食文化の拠点であつたことは前節記載の通りである
が、この国際都市はまたキリシタン文化の拠点でもあつた。そしてこのキ
リスト教の神父たちがパン食様式を全日本にひろげるのに大きな役割を果
したのである。

そこでなぜかに言及するまえに、キリシタン普及の略年譜を示せばあら
まし以下の通りである。

キリシタン普及略年譜

西 暦	年 号	事 項
一五四八年	天文一七年	日本人ヤジロウ印度のポルトガル領ゴアで洗礼をうける
一五四九	〃 一八	ヤソ会神父聖フランシスコ・ザヴィエルヤジロウを伴い鹿児島に上陸ヤソ教をもたらす
一五五〇	〃 一九	ザヴィエル平戸、京都、山口で伝道

一五五一	天文二〇	ザヴィエル印度に去る。トルレス山口で伝道
一五五二	〃 二二	バルタザル・ガゴ豊後で伝道
一五五三	〃 二二	ルイ・アルメイダ平戸で伝道
一五五九	永禄二	豊後にヤソ会病院開設。ガスバル・ビレラ京都で伝道
一五六三	〃 六	肥前の領主大村純忠受洗
一五六五	〃 八	京都の宣教師追放される
一五六九	〃 一二	ルイス・フロイス信長に謁見、京都居住及伝道を許される
一五七八	天正六	豊後の領主大友宗麟受洗
一五八〇	〃 八	肥前の領主有馬晴信受洗
一五八二	〃 一〇	大友、大村、有馬三氏ローマ法王に少年使節団を派遣
一五八七	〃 一五	大村純忠没(五五才) 大友宗麟没(五八才)
一五八七	〃 一五	豊臣秀吉宣教師を追放長崎を直轄領とする
一五九五	文禄四	細川忠興夫人(ガラシヤ)受洗
一五九六	慶長元	オルガンチノ京都・肥前で伝道
一六一一	〃 一六	長崎で二六聖人殉教
一六一二	〃 一七	伊達政宗布教自由の告示
一六一三	〃 一八	幕府直轄領のヤソ教禁止
一六一四	〃 一九	伊達氏の臣支倉常長渡欧
一六一七	元和三	高山右近らのヤソ教徒国外追放
一六一九	〃 五	諸藩のヤソ教徒迫害盛んになる
一六二九	寛永六	京都のヤソ教徒火六〇余人刑となる 踏絵のはじめ

一六三〇	寛永七	ヤソ教関係書の輸入禁止
一六三七	〃 一四	島原の乱おこる
一六三九	〃 一六	宗門改めはじまる
一六四〇	〃 一七	切支丹奉行設置
一六四一	〃 一八	鎖国の完成

以上が鎖国以前のヤソ教年譜のあらすぢであるが、ザヴィエルの来朝から鎖国までの九十年間ヤソ教は法敵仏教勢力とこれにつながる保守勢力との抗争をくりかえしながら、成長発展の一途をたどつた。慶長時代(一五九六〜一六一五)の終り頃にはヤソ教徒七五万人といわれたくらいである。従つて信徒の分布も全国に亘つており、教会堂も秋田から南部地区まで拡がりをみせた。しかし、その中心地が長崎を中心とする中部九州地区であつたことはいふまでもない。

しかしここでの問題はキリスト教の消長そのものでなくして、パン食がなぜ基督教と共に拡がつていつたかの問題である。一口にいうとパンと葡萄酒はキリスト教の儀式になくはならぬものであつた。キリストは人類の罪を一身に背負つてはりつけになつたが、その前夜弟子たちにとつてパンは自分の肉であり、葡萄酒は自分の血であるといひ、パンをたべ葡萄酒を飲む度に自分のおしえを思い起すようにと語つた。それ以来パンと葡萄酒はキリスト教の儀式に絶対不可欠の神聖なものとなつたのである。だから信徒がふえ、教会堂がふえるにつれてこの二つのものが拡がつていつた。しかし葡萄酒は国産できないが、パンは国産できる。葡萄酒の貴重品扱いにたいしてパンが次第に大衆の中に浸透していつたのはそのためである。

なお、宣教師をふくむ南蛮紅毛人のすべては、日本で本国にいたときと同じようなパンと乳肉卵と西洋野菜の食生活を送ることにとつめた。これにたいし仏教の僧侶たちは殺生戒をおかして少しも恥としない神父たちはなまぐさ坊主であり、そのようなヤソ教は邪教であるときびしい非難のこ

えを放つたが、神父たちはその食習慣をあらためず、逆に殺生戒は迷信であり、そのような迷信を説く仏教を野蛮な宗教であると攻撃した。

だから、ヤソ教に帰依した人々はそのような迷信の象徴である神社仏閣を打ちこわし、殺生戒を否定して仏教渡来以前の肉食をとることを誇りとするようになった。パンと乳肉卵は不可分のものであるから、このような欧化風潮がパン食の普及に役立ったことはいうまでもないが、多くの西洋野菜がこの時代に長崎を中心に拡がりをみせたのも、パン食にむいた野菜が在留外人にとつてぜひ必要なものだつたからにはかならない。

第三節 パンの語源

「パン」ということばは鎖国後も長崎地方の方言の一つとして伝存されたが、この日本語の語源はポルトガル語である。これは日本におけるポルトガルの影響が、他の南蛮紅毛諸国よりも圧倒的に大きかつたことを示すものであるが、この点について文学博士新村出は次の通り語っている。

「パンは元来ポルトガル語である。日本ではこれがオランダ語のブロード、イギリス語のブレッドを超越した。パンは十六世紀の中葉に渡来して伝存した。そのもの、その系統、その名の残存、本邦の外来語史上、このパンの如き例はきわめてめづらしい。パンが畢竟ラテン語のパニスを根拠とすることは明白極まる……」（「日本パン食史序説」文春の昭二三・六掲載抄）

また、文学博士大槻文彦編の「大言海」によると「パンはポルトガル語の Pão にもとづく」とあり、富山房の国民百科大辞典は「パン（英 BREAD 独 BROTT 仏 PAIN）パンの語はポルトガル語 Pão から出た」とのべている。さらに平凡社の大百科辞典は「パン」麩包―麵麩―BREAD はポルトガル語の Pão にもとづく」としており「長崎市史風俗篇」の著者古賀十二郎は「パン」ということばはポルトガル語の Pão に外ならぬ。スペイン語では Pan と書く」としている。

何れもパンの語源がポルトガル語であることで一致しているが、「日本

の外来語」（岩波新書）の著者矢崎源九郎氏もこの説をとつて次の通り言及しておられる。

「パンということば自体は（略）十六世紀末の「サントスの御作業（聖者伝）」（一五九一）「ドチリナ・キリシタン（聖教要理）」（一五九二）「伊曾保物語」（一五九三）「ギヤド・ペカドル（罪人の導き）」（一五九九）等々に次々にみえている。これらはカトリックの宣教師たちが編述したいわゆるキリシタン物と称せられる古い文献類で、キリシタン関係用語はおもにこういつた文献類にみえている。パンはいうまでもなく教会の儀式においてぶどう酒と共になくてはならないものであつたし、それにポルトガル人たちの主食でもあつた。こういうようなことからしてパンはポルトガル語の Pão を借りたことばであり、早くからかなりの範圍の人々に知られていたと思われる。したがつて最も早いヨーロッパ系の外来語の一つと断定してさしつかえない」と。

しかしこのように普及していつたパンも、徳川幕府の思い切つた鎖国政策のために、ほとんどその姿を消し去つたのである。

それは踏絵の制によつて宗門あらためが行なわれるようになって以来、キリスト教の儀式と不可分のパンをたべることは、かくれキリシタンと疑われてもしかたのないことだつたからである。

第二章 鎖国時代のパン

鎖国時代のパン略年譜

左記は鎖国時代のパンのあゆみに関する略年譜である。

鎖国時代のパン略年譜

西暦	年代	事	項
一六三九年	寛永一六年	鎖国を断行、ポルトガル人とその混血児を長崎から追放、宗門改めを実施する	
一六四〇	〃 一七	平戸蘭館破壊を命ずる	
一六四一	〃 一八	平戸の和蘭商館員を長崎の出島(和蘭屋敷)に移す ヤソ教綿依の諸大名を檢挙する	
一六四二	〃 一九	諸国飢饉、百姓の米常食を禁じ、うどん、そば、まんじゅうの商売をやめさせる	
一六五四	承応三	かくれキリシタン訴人の褒賞を増額する	
一六六二	寛文二	諸国にかくれ切支丹の厳探を命ずる	
一六六四	〃 四	宗門改めを断行、五人組制度を活用してのかくれ切支丹発見を令す	
一六七四	延宝二	キリシタン厳禁の高札を出す	
一六八〇	〃 八	キリシタン訴人の報奨を増額	
一六八二	天和二	諸国に切支丹厳禁の高札	
一六八七	貞享四	転び切支丹扱い規定を公布する	
一六八九	元禄二	長崎に唐人屋敷を新設し唐人の市内散宿を禁止する	
一七〇八	宝永五	神父ヨハンンドッチ大隅国屋久島に密入国する	

一七〇九	〃 六	新井白石神父ンドッチを切支丹屋敷で訊問、その顛末を「西洋紀聞」として出版
一七一八	享保三	「製菓集」刊行される
一七二〇	享保五	キリスト教以外の漢訳洋書の輸入を解禁する
一七三五	〃 二〇	西川正休(如見)編「長崎夜話草」刊行
一七八八	天明八	江戸に唐人参座(長崎屋源右エ門)を設ける
一七九一	寛政三	大槻磐水(玄沢)述「蘭説弁惑」刊行
一七九二	〃 四	外国船渡来の際の処置令を公布 露使ラツクスマン漂民光太夫らを伴い根室に來航通商を要求
一七九四	〃 六	大槻玄沢ら和蘭正月の宴を芝蘭堂にて催す
一八〇〇	〃 一二	幕府西洋小麦の栽培を奨励する
一八〇六	文化三	難破外国船撫恤令を公布
一八〇七	〃 四	大槻磐水著「環海異聞」刊 フルトン汽船を發明する
一八二五	文政八	異国船無二念打払令を公布
一八三五	天保六	ヨーロッパに手押式圧搾酵母出現する
一八四〇	天保一一	米国でモールス電信器發明される
一八四二	〃 一三	阿片戦争(清英戦)で清国大敗英に香港を割讓する 伊豆薩山代官江川坦庵兵糧パンを試作する
一八四四	弘化元	天保の異国船打払令を緩和、薪水給与令を出す。この頃洋式軍備熱たかまる
一八四六	〃 三	オランダ国王幕府に開国を勧告する 幕府琉球を仏に開港する 幕府に海防勸諭下付される

一八五一	嘉永 四	米船土佐の漂民中浜万次郎を琉球に送還する
一八五二	嘉永 五	オランダ来年米艦隊の大華来航を予告する
一八五三	六	クリミア戦争はじまる ペリー浦賀に来航、露使プウチャーチン長崎に来航 幕府高島秋帆の禁を解く
一八五四	安政 元	ペリー再来、日米和親条約調印、次いで日英、日露、日蘭、日仏和親条約調印
一八五五	二	江川坦庵没(五五才)

第一節 和蘭屋敷と和蘭冬至

島原の乱にてこずつた幕府が、キリスト教の侵透を阻止するために貿易の利まで犠牲にして鎖国を断行し、ポルトガル人だけでなくその混血児まで悉く国外に追放したことは前章で言及した通りであるが、それにも拘らず容易にこの舶来の宗旨を根絶することはできなかった。幕府が苦肉の策として踏絵の制を採用すると共に宗門人別帖制度を工夫し、日本人を一人も漏れなく何れかの仏教宗派に所屬せしめる措置を講じ、さらに五人組制度、訴人制度などありとあらゆる方法を講じてその根絶をはかつたことは略年譜記載の通りである。

問題はこうした状勢の悪化がパン食文化に及ぼした影響如何であるが、前述の通りパンと葡萄酒は基督教の儀式にとつてなくてはならないものであつた。従つてパンを焼きブドウ酒を飲み、仏教の殺生戒を侵して肉乳卵食をしたりすることは、おれはキリシタンだと宣言するに等しい暴挙といつてよい。いつでも誰でも訴人しなさいというようなものであつた。

だからこの鎖国を契機としてパンをたべることはもちろん、パンということばすらめつたに口でできないようになったが、そうしたパン食にとつての闇黒時代の到来に拍車をかけたのは、鎖国の直後に全国をおそつた大飢饉であつた。

この大飢饉に直面した幕府が採つた措置は、百姓の米食禁止とパン、ビスケットを含むうどん、そば、まんじゅうなど小麦粉製品の市販禁止措置であつたが、これで長崎市中のパンや、そば、うどん、まんじゅうなどはきれいにその姿を消し去つたのである。その禁がゆるんでパンやカステラなどの南蛮渡来のたべものが長崎名物の一にかぞえられるようになったのはずつと後のことである。

ともあれこうしてパンは鎖国を契機としてその名だけあつて実物がみられないことになつたが、それにはたつた一つの例外があつた。それは出島のオランダ屋敷にいるオランダ人たちに供するパンだけは例外としてつくて差支ないことになつていたからである。しかし、この点に言及するまえにオランダ屋敷についてすこしふれなくてはならない。

問題はあれだけ思い切つた鎖国を断行した幕府が、なぜオランダ貿易だけは残置したかということであるが、それはカトリック教国が、キリスト教を植民地的侵略政策に利用していたのに対して、プロテスタント(新教国)は宗教と政治・外交との分離政策をとつていたことに原因がある。オランダやイギリスは新教国だつたので、それを知つていた幕府は島原の乱の際オランダに援軍を乞うた。島原一揆は重税とキリシタン弾圧に耐えかねておこつた宗教的色彩の強い反乱であり、首領はキリシタンの天草四郎であつた。だから旧教国はこれが討伐に組することなど問題外であるが、新教国のオランダは幕府の乞いを容れて、自国の軍艦を島原沖に廻航し、籠城軍に砲弾を打ちこんだのである。

鎖国の際オランダだけが例外扱いされたのは、幕府がこうした事情を考慮したからであつた。

しかし一本の木橋で本土とつながっている出島に押しこめられたオランダ人は、全くのカゴの鳥であつた。だからオランダ人にとつてこれは「国立の監獄」ともいふべきものであつたが、彼等は貿易独占の利を確保するために敢てこの屈辱に甘んじたのである。しかし日本側から見ると、この小さな人工島が唯一無二の「鎖国の窓」であつた。二百十三年の鎖国期間

中この小孤島の「オランダ屋敷」が果たした歴史的役割が大きかったことは改めて言及するまでもないが、前述の如くパンの技術が細々ながら伝存されたのもこのオランダ屋敷があつたからであつた。

このオランダ屋敷の最大の行事は「阿蘭陀冬至」と「阿蘭陀正月」であつたが、何れも太陽暦で催された。太陽暦では十二月二十五日前後が冬至になる。したがつて、これはキリスト降誕祭の日に近い。それ故このオランダ冬至は偽装されたクリスマスであつたが、日本側はこれを知つて知らずでか不問に付した。それはともかくとしてこのオランダ冬至とオランダ正月にはオランダ屋敷の関係役人や長崎の主だつた人々が招かれ、洋食洋酒、パン、ケーキの豪華な宴会が催された。

日本人はこのめづらしい異国の珍味をたべてしまうのは惜しいからといつて持ち返り、これを蘭学習得のために長崎に遊学している諸藩士などに頒つことを慣わしとしていた。そんな都合だつたから鎖国以来次第に洋風食についての日本人の知識は稀薄になつていつた。

天明八年（一七八八）に蘭学者大槻磐水（玄沢）の口述をまとめた「蘭説弁惑」なる一書が刊行されたが、それをみるとパンについて次のように言及している。

問て曰く。おらんだ人常食に「ばん」というものを食する由。何をもつて作れるものによ。

答て曰く。これは小麦の粉に糴を入れ、練り合せて蒸焼にしたるものなり。朝夕の食料これなり。

問て曰く。飯は絶えて用いざるや。

答て曰く。飯も食すれどこれは至つてわずかばかりなり。（略）「ばん」といふは何国の詞かいまだ詳ならず。和蘭にては「ぶろふと」といふ。和蘭隣国松原察という国にては「ばいん」といふよし。この語の転ぜるか。

こんな調子で第一級の蘭学者でも「ばん」の語源がポルトガル語であることを知らないご時勢となつてしまつたのである。

しかし享保五年（一七二〇）刊の西川正休（如見）編「長崎夜話草」を

みると、「長崎土産物」の項で南蛮菓子色々を紹介しているが、これにはパン、ビスカウト、カステラ、コンペイトなどの名も挙げられている。

これは時日の経過と共に次第に切支丹の取締りが神経質でなくなつた為、オランダ屋敷によつて伝存されたパンや洋菓子の技術が生かされ、長崎みやげとして復活していつたことを示すものに外ならない。

第二節 唐人屋敷と唐饅頭

蘭学者大槻玄沢は前記の「蘭説弁惑」で、「長崎を唐の地のようにおぼえ：」云々と語つてゐるが、これは唐人屋敷を指していつたことである。

「蘭説弁惑」の刊行は一七八八年であるが、長崎に唐人屋敷が出現したのは一六八九年であつた。従つて大槻はこの唐人屋敷に出入りして異国情緒を満喫したわけだが、幕府がこの元禄二年（一六八九）という時期に、市内に散宿していた一万人の唐人を長崎市外の十善寺村に集結したのは、一つは密貿易取締りのためであつたが、いま一つは唐經由のキリスト教取締りの必要にせまられたからであつた。いまこの唐人屋敷とは館内町といつてゐるが、これは唐館構内の意味である。

長崎の昼しづかなる唐寺や

おもいづれば白きさるすべりかな

これはこの唐人屋敷の名ごりをとどめる興福寺の思い出を斎藤茂吉がうたつた一首で、境内の記念碑にきざまれてゐるが、ここから支那料理と支那饅頭がもたらされたのである。この支那まんとうについて宝永六年（一七〇九）刊の「大和本草」（貝原益軒）はほぼこういふ工合に解説してゐる。

「蒸餅は麩にて作り甘酒にて製す。形まんぢゆうの如くして大なり。長崎につくる。中華人殊に山西人朝夕の糧となす。味淡くして滯らず、病人食して妨げなく、また餡あるもあり。味はわが国の饅頭に劣れり。東鑑の二十字といふはこの蒸饅頭なるべし」と。

何れにしても欧州の発酵パンは焙焼パンであり、アジアの発酵パンは蒸

しパンであり、その代表的蒸しパンがこの唐まんとうであるが、その焙焼パンはオランダ屋敷によつて伝存され、蒸しパンは唐人屋敷によつてもたらされたのである。

第三節 鎖国前期の製パン法

南蛮交易時代のパンの製法については記録がないが、鎖国時代のパンの製法は享保三年（一七一八）刊の「製菓集」によつて次の通り伝えられている。

「まづまづ古めんと申すものを仕り候。これは、うどん粉一升を甘酒にてこね、いかにも軟かにこねて何れへなりとも入れ一夜おき申し候得ばよくふくれ申し候。

甘酒仕様——常の麴五合あわせたほどに仕り、少し泡立ちたるよき加減のとき、水のうにてこね申し候。さてうどん粉一升到砂糖六四〇匁、ふるめんを入れ、水にてよき加減にこね申し候。

パン仕様——丸パンにても平パンにてもぞみ次第つくり、箱ふたにならばおけば、そのパンふくれ申し候。

ふくれ様——夏は一時、二時のうちにふくれ申し候。何時にてもふくれたるとき焼き申し候。

風呂仕様——上方四尺四方ほどにてパンの出し入れもよく候（略）三尺まわり薪二束ほど焚き、さてそれをかき出しわらの箒を水にしめし内のごみをよくかきだし、さてパンをならべ申し、風呂の口をむしろにても、こもにても、水にてもよくよくしめし防ぎ申し候。」

これはあきらかに日本独特の製パン法であつて、単なる欧米模倣ではないところに注目しなくてはならない。

第四節 江川坦庵と兵糧パン

幕末になると我國の近海に出没する外国船が激増した。そして強大な武力を背景にして開国をせまり、中には乱暴狼藉におよぶものもあつた。し

かしこれにたいして幕府は何らの対策もないまま周障狼狽するのみであつた。このような状態に直面して効果的な国防策を樹立実行して祖国の危急をきりぬけようとして立ち上つたのは進歩的蘭学者たちであつたが、その先頭に立つたのは西洋流兵学の權威として知られた伊豆菲山代官の江川太郎左衛門坦庵公であつた。

この人がこの困難な時期に幕府の代官という地位に拘らずその力量を發揮することができたのは、もとよりその高邁な識見の然らしめるところではあるが、同時に幕閣の中に強力な支持者があつたからでもある。

しかし、ここで坦庵公の多岐に亘る功業に具体的に言及することは目的でないからそれは省略するが、幕府の依頼をうけて江戸湾周辺の海防策を樹立したことは広く知られており、またこの人が近代日本陸海軍の創始者であることも周知の事実である。

坦庵公はまた人材の育成にも心血を注いだが、その人材の中には明治維新の中樞の推進力となつた佐久間象山、桂小五郎、橋本左内、黒田清隆、大山巖などの偉材がふくまれている。

この憂國の先覚者坦庵公が兵糧パンをはじめて試作したのは天保十三年壬寅の四月十二日であつたが、このことの歴史的意義については少しく当時の状況を語らなくてはならない。

清國の憂國者林則徐が清國人を毒するアヘンを絶滅するため、密貿易のために英人がもつていたアヘンを焼き捨てたのは一八三九年（天保一〇）であつた。ところが清國侵略の機会をねらつていた英國はこの事件をとりあげて、清國に難題を吹きかけた。こうしてはじまつたのが史上有名な阿片戦争であるが、この戦争は一八四〇年（天保一一）から四二年（天保一三）まで続き、老大清國は近代兵器で武装した英軍に惨敗したのである。

この清英戦争はいちはやく清國の貿易商から長崎に通報されたが、その情報によると清國を降した英國は余勢を駈つて北上、日本にせまる戦略だといふ。防備の薄弱な日本のうけた衝撃は大きかつた。というのは当時の日本は、文政八年（一八二五）に制定された異國船無二念打払令が生きて

いたからである。これは文字通り異国船が現れたら問答無用で打ち払えという法令だから、英軍が北上して近海に現れたら忽ち交戦となる。世界最大国の清国が勝てないイギリスに日本が勝てるはずがないから、これは即ち亡国のための法令だということになる。

そのため狼狽して為すところなしというのが時の幕閣の実状であつたが事のなりゆきを憂慮した江川坦庵は、幕府首脳に上申取敢ずこの暴法令の改訂をせまつた。その結果、幕府は天保十三年（一八四二）七月、この法令を撤廃それに代るものとして薪水給与令を出した。これは異国船が来たら鎖国の祖法を説明、おとなしく退帆せしめようという趣旨の法令である。しかし相手が説得に応じなかつたらいくさになる。そのときに備えなければ無策のそしりを免れないが、幕府も諸藩も何等有効なきめ手をもたなかつた。そこで江川坦庵は幕府に進言その委嘱をうけて、江戸湾口の浦賀港の防備を強化すると共に江戸の近海を巡視、応急の防禦策を樹てた。そして幕府の諒解を得ていそぎ大砲の铸造をはじめたのである。これがいざというときにそなえる用意であることはいくまでもないが、坦庵のみるところでは日英戦争は必ず長期戦になる。そこで日本は近代兵器で武装した侵入軍とゲリラ戦を展開することになるが、その場合泰平に慣れた武士だけではとてもいくさにならないから国民皆兵制によつて兵力を確保しようという方針であつた。

しかしその場合握りめし弁当方式でいくと敵前で炊事をしなければならぬが、そうするとその炊煙に敵弾が集中する。その結果味方が大損害をうけることは必定である。そこで坦庵公はこの難問を解決するために兵糧パンを用意しなければ……と思ひ立つたのではないかと思う。

こうして坦庵公は天保十三年四月十二日伊豆韮山の邸内に急造したパン焼窯ではじめて兵糧パンを試作した。その作業を担当したのは高島秋帆の従者作太郎であつたが、この人はオランダ屋敷の料理方として製パン技術を身につけた人であつた。

丁度そのころ英国に大敗した清国は、城下の誓いをして香港を英国に、

割譲すると共に無条件で五港を開港するという屈辱条約に調印するための談判中だつたから、もうすぐイギリスは新領土ホンコンを足溜りにして北上、日本におそいかかるだらうというのが日本の識者の見方であつた。だからこの日の兵糧パンの試験焼きが異常な期待の下に行なわれたことは改めていふまでもない。

試験の結果は上々であつた。そこで本格的な貯蔵用兵糧パンの製造がはじまつたが、幸にしてイギリスはクリミア戦争の勃発等のあることがあり、その北上は遂に実現しなかつた。しかしやがて米・露両艦隊の訪日、開国条約の調印となり、内外の状況は緊迫の一途をたどつた。そのために江川坦庵に做つて各藩が競つて兵糧パンをつくり、これを有事のときにそなえて貯蔵するという兵糧パンブームがおこつた。

韮山の江川邸には徳富蘇峰筆の「パン祖江川太郎左衛門」と大書した記念碑が建つているが、これは地元沼津市の篤志家片岡春吉氏の献身的努力によつて終戦後建立されたもので全国パン協議会が正式な建立者である。

以上のパンの歴史でもわかるようにパン祖は決して坦庵公ではない。それにも拘らず、この人がパン祖といわれるのは坦庵公が祖国防衛の見地から意識的にパンの効用に目をつけ、これを普及するきつかけをつくつた最初の人物だつたからに外ならない。

なお、江川公は出漁中漂流、アメリカで新知識を身につけて嘉永四年（一八五一）に帰国した中浜万次郎を手許に引取り、この人を大いに活用したが、この中浜万次郎によつて江川家のパンはさらに改良を加えられた。

また安政元年（一八五四）にはアメリカのペリー、ロシアのプウチャーチンがそれぞれ艦隊をひきいて来航、強硬に開国をせまつたが、露艦は下田で談判中、大地震がおこり大海嘯のために艦を損傷、帰国できなくなつた。そこで坦庵公は幕命によつて豆州戸田浦で露軍帰還のための船を建造したが、これが日本における西洋式造船工事のはじまりである。

この修理は露艦乗組みの五百余人と日本人の合作によつて進められたがこのロシア人のための製パン作業も坦庵公の指揮によつておこなわれた。

時の執政阿部正弘は、鎖国から開国への歴史的転換期をのりきるには、
 坦庵公以外に人なしと考へ、安政元年（一八五四）大英断をもつて坦庵公
 を幕府の勘定奉行に登用することを決意、その内命を伝えて承諾を得た。
 しかし、その就任直前坦庵公は心労重つて病床の人となり、翌安政二年、
 （一八五五）正月十六日、江戸本所の私邸で惜しくも遽逝した。ときに五
 十五才、いまま韭山にのこる反射炉は坦庵公憂国の至情の名残りである。

第三章 開国以後維新以前のパン

幕末のパン略年譜

西 暦	年 号	事 項
一八五四	安政 元	日米、日英、日露、日仏、日蘭和親条約調印 アメリカに下田、ロシアに下田、箱館、長崎を開港 吉田松陰米國渡航に失敗捕われる 露艦ディアナ号を伊豆戸田浦で修理中パンを給食 長崎に海軍伝習所開設、オランダ士官の訓練開始 水戸の藩医柴田方庵長崎のオランダ人からパンの製 法を伝授される パン祖江川太郎左衛門没
一八五五	安政 二	幕府箱館でロシア人に牛肉を供給することを許す 米総領事ハリス着任下田の玉泉寺を領事館に充てる 長崎の海軍伝習所を江戸に移し海軍教授所と改める
一八五六	安政 三	
一八五七	安政 四	日米、日露、日蘭、日英、日仏修好通商条約調印
一八五八	安政 五	福沢諭吉江戸鉄砲州に洋学塾を開く
一八五九	安政 六	この頃各藩兵糧パンの製造を相次いで開始

一八六〇	万延 元	英公使オールコック着任 下田を閉鎖し神奈川、長崎、箱館を開港する 米人宣教師ヘボン以下続々来朝する 新見正興ら条約批准のために渡米する この年横浜在留外人二十三名 勝海舟、福沢諭吉、中浜万次郎ら威臨丸で渡米する 日蘭修好通商条約調印 オランダ船初めて品川に來航する 旗本の子弟に外国語学習を許す
一八六一	文久 元	横浜に外人墓地を設定する 兵庫、新潟開港延期の使節団渡欧する アメリカで南北戦争はじまる（六五年まで） 幕府オランダに榎本武揚、津田真道、西周等を留学 させる
一八六二	文久 二	横浜居留地に聖心教会堂竣工 横浜の外人パンヤケキを餌に日本人との接触をは かる 横浜居留地居住外人の下僕として製パン技術を得得 する者殖える ヘボン博士横浜居留地に診療所を開設する 在留外人横浜郊外で西洋野菜の栽培をはじめ 英艦隊鹿兒島を砲撃（薩英戦争） 横浜の邦字新聞に外人パン屋の広告載る
一八六三	文久 三	横濱の邦字新聞に外人パン屋の広告載る 英人クラーク横浜居留地に横濱ベーカリーを開業す る
一八六四	元治 元	長崎居留地に大浦天主堂竣工

一八六四	元治 元	長州藩士井上馨、伊藤博文等五名藩命により留学のためイギリスに密航する 新島襄（同志社大の開祖）箱館を経て国外に脱出アメリカに留学する フランス公使ロッシヌ着任する 英米仏蘭連合艦隊下関を砲撃（馬関戦争） 薩摩藩士寺島宗則、森有礼、五代友厚ら八名藩命によりイギリス留学のため密航する 横浜鎖港騒動を機に英軍一千五百人横浜に上陸しそのまま居坐る 英公使パークス着任 開国条約勅許
一八六五	慶応 元	横浜製鉄所、横須賀造船所起工、仏から数十名の技術者来朝する（フランス式パン、ケーキ流行の発端） 陸軍に仏式採用されフランス士官来朝 薩長連合の密約成る 遣露使節小出秀実等出發
一八六六	慶応 二	幕府中村敬宇、菊池大麓、外山正一等十四名の俊秀を海外に留学させる 一般留学生の海外渡航を許可 福沢諭吉「西洋事情」を刊行 明治天皇踐祚
一八六七	慶応 三	横浜の中川屋嘉兵衛邦字新聞にパン、ビスケットの広告を出す 兵庫開港勅許 福沢諭吉「西洋案内」刊

三河屋久兵衛神田に西洋料理店を開く
幕府横浜に語学所を設ける
鹿児島紡績所英人技師十二名を招き操業を開始
徳川昭武等バリー万国博に従者を伴い出發する
横浜に留外人一、一三〇名となる
大政奉還王政復古成る

第一節 幕末のパンの概見

鎖国の祖法を破つて日米和親条約が調印されたのが安政元年（一八五四）であり、徳川十五代將軍慶喜が大政を奉還して王政復古の号令が出されたのが慶応三年（一八六七）であつたから、幕末の開国時代は足かけ十四年でもつて終りを告げたことになるが、この短い十四年間は封建国家から近代国家への移行をめざした陣痛期であつた。

したがつて国際的にも国内的にも激動期であつたが、この開国を機として西洋文明の輸入が次第に本格化していつたことは否定しがたい事実である。しかし幕末の日本は開国の責任者であつた幕府と攘夷討幕の二大勢力が相争つていた為、西洋文明の輸入にはなお多くの抵抗があつた。

そのために本格的な文明開化の到来というところまではいかなかつた。しかしながら鎖国時代とくらべると状勢が大きくかわつたこと勿論であつて、パン食復興のきざしがみえはじめたのもこの幕末であつた。

いうまでもなくパン食復興の基地となつたのはまづさきに開港された横浜と長崎及び箱館であつたが、特にその中心となつたのは江戸の大支関である神奈川こと横浜の外人居留地であつた。これは鎖国の窓長崎の歴史的役割が終りを告げたことにほかならない。

横浜の開港は安政六年（一八五九）であつたが、翌万延元年（一八六〇）の横浜に留外人はわずかに二十三名にすぎなかつた。それが七年後の慶応三

年(一八六七)には一、一三〇名にふえているところからも、この土地の欧化風潮の発展がめざましかったことがわかるはずである。いうまでもなく在留外人はすべてパン食生活であつた。従つて彼等と接触する邦人がパンやケーキに親しむようになったことはいうまでもないが、彼等の下僕となつた邦人の中から製パン技術者が続出したことも決して不思議ではなからう。

また開国以後幕府や諸藩の要請によつて、我国近代化の指南役として来朝する外人が次第にふえていつたが、彼等が西洋流の食生活を導入するキツカケをつくつたことも無視できない。

それと同時にここで指摘しなければならないことは、幕末開国以後海外先進国への留学者が次第に増加していつたことである。明治維新から鹿鳴館時代にかけての欧化風潮の先頭に立つてパン食文化の普及浸透の役割を果たしたのはこれらの留学生であつたが、彼等は殆んど例外なくパン食党であり、パン食文化の強力な推進者でもあつた。

なお幕末から維新にかけて内外の状況は緊迫の連続であつた。そのため江川坦庵公によつて手をつけられた兵糧パン熱が異常な盛り上りをみせたこともこの時代を彩る特色の一つであつた。

以上は幕末のパンをめぐる一般状況の概観であるが、以下項を分つて幕末のパンに言及する。

第二節 ハリスのパンぬき食生活

アメリカ艦隊の強大な軍事力に屈した幕府が次々と日米和親条約に調印したのは安政元年(一八五四)の三月であつた。そしてこの条約によつて開港された下田港に、アメリカ初代総領事ハリスが着任したのは安政三年(一八五六)七月であつた。

下田に上陸したハリスは村外れの玉泉寺を領事館としてここに星条旗をひるがえしたが、ハリス日記をみると、彼はここで西洋式のパンと肉の生活をするのになんか困つたとしている。いまここにその日記の抜き

書きを示すとあらまし次の通りである。

ハリスの滞日々記抄

一八五六年(安政三) 一二月二五日、下田の気候は望み得る限りの最もよいものである。畑は広く植付けられ或いは時かれた小麦で非常に青々としているし、赤い椿の花もみえはじめている。

一八五七年四月一日、パン、茶、砂糖、薬味、漬物、コーヒーなどはみな本国から持つてきたものである。

同年四月三日、私の健康はきわめて不満足な状態にある。私にはこの消化不良に起因する胃酸過多を癒すことは不可能である。私は食物をパンと米、それに当地で入手する屠肉だけにとどめ、バター、油、果物、それと馬鈴薯以外の野菜のすべてを絶つていく。

同年五月二九日、ただいま麦の刈り入れの最中である。穀粒をかぞえてみると一つの穂に五〇〜六〇粒ついていた。

同年五月三一日、私は私の食事をただの炊いた米と少量の魚肉だけにした。ところがその魚肉は鳥肉よりもよくなかつた。パンは新しく焼いたものもアメリカン・ビスケットもたべることができない。私はひどい胃酸過多に悩まされ、日一日とやせていく。それなのに私の食欲が頗るよいのは何と奇妙なことであらう。

同年六月二三日、下田と箱館の間は日本船による直接の通信が許されていないので、私の必要な食料は箱館よりも香港で求めた方がましなのだ。私は粉、パン、バター、ラード、ベーコン、ハムを切らしている。そして実のところ二カ月以上もあらゆる種類の外国食糧を切らしているのだ。私は米と魚と極めて貧弱な家畜とで食生活をつづけている。

以上がハリス日記の一部であるが、これでも彼が西洋食に餓えていたことがよくわかる。

ハリスは、やがて強力で通商航海条約の締結をせまつた。その結果安政五年(一八五八)六月遂に日米通商条約が調印され、満一年後に神奈川、長崎、函館の三港を開港することになつたのである。

なおここで珍談を二つ紹介すると、安政二年（一八五五）箱館の英国船から牛肉を供給するよう幕府に再三申入れを行なつた。当時の日本は肉食敵禁でその禁を侵したものは遠島の刑に処せられることになつていたので幕府はこれを拒絶したが、相手はそれでも断念しない。閉口した箱館奉行の堀織部正は幕府海防掛りの措置を仰いだところ、小田原評定の結果出された訓令は、牛肉の件で国交断絶ともいくまいから薬用という例外措置で使い古しの老牛を相渡すようにという内容のものであつた。

下田でもハリスとの間でこれに似たような事件がおこつた。それはハリスが牛乳がほしいから牛をゆずつてほしいと申出たのが発端であつたが、これに対する幕府の返答がふるつてゐる。

曰く「このほど当所勤番の者へ牛乳の儀申出られ候につき、その旨を奉行に申し聞け候処、牛乳は国民一切飲用致さず、殊に牛は土民ども耕作その他山野多き土地柄故運送のため飼いおき候のみにて、別段蕃殖いたし候儀更にこれなく、まれには小牛生れ候儀これあり候ても乳汁は全く児牛に与え、児牛を主に生育致し候こと故、牛乳を給し候儀一切相成り難く候間ことわりに及び候」と。

この石頭に激怒したハリスは、それなら香港から山羊を取り寄せるが、それなら文句はなからうとせまつた。

答 山野へ放し飼いの儀は相成り難く候

問 構内へ差し置き候儀は如何に候や

答 豚同様のもの故構内へ差置き候位の儀は苦しかるまじく、放し飼いは相成り難く候

これが麗々しく外交文書にのつてゐるのだから、開国をしたといつてもそれがいやいやながらの開国であつた。それは決して積極的なものではなかつた様である。

第三節 横浜のパンの黎明期

横浜、長崎、箱館の開港は安政六年（一八五九）の六月一日であつた。開港当時の横浜村は全くの寒村にすぎなかつたが、次第に貿易めあての外国人が居留地へやつてきた。しかし外人には日本語がわからないし、日本人にはオランダ語を解するものはあつても英語やフランス語など全くのちんぷんかんぷんである。こまつた外人は最初パンやケーキを日本人にくれてやつて親交をむすぼうとした。そこで外人から無断でものをもらふことまかりならぬというきびしい布令が出された。そのためにもめことが絶えなかつたが、この年のくれになると外国から続々宣教師が来朝した。その

主なるものはヘボン、ブラオン、フルベツキ、シモンズ、リギンスなどであつたが、ヤソ教が黙認されたのは明治六年（一八七三）だから、当時はむろんヤソ教はご法度であつた。しかし安政五年（一八五八）には「踏絵の制」が廃止されてゐるから、早晚そのご法度は解禁されようと見込んでの宣教師の来日だつたわけだ。

居留地は治外法権地帯だから、宣教師はそこでは自由に行動できる。文久二年（一八六二）横浜居留地に聖心教会堂が生れ、元治元年（一八六四）長崎居留地に大浦天主堂が誕生したのはそのためであるが、彼等はまずこの居留地にいる日本人に布教の手をのばした。そこで幕府は説教をきいた日本人を片つばしからつかまえて投獄した。こうしてはやくも宗教紛争がおこつたが、布教にはまだ時期尚早とみた宣教師は、河岸をかえて日本人の教育や医療を通じての接近政策をとつた。

文久二年（一八六二）にヘボン博士が居留地に診療所を開設、翌年ヘボン夫人が英字塾を開いたこと、これと前後してバラが連上所の教師となつたことがその実例であるが、このヘボン診療所では病人にパンとミルクを与えた。それがキツカケとなつてパンが病人食として次第に知られるようになったのである。

一方、在留の外人は日本人を下僕に雇い、彼等に製パンの仕事をやらせ

幕末の紛争略年譜

た。こうして日本人にもパンを焼ける職人がふえていつたのであるが、文久三年（一八六三）になると、横浜の邦字新聞に外人パン屋の広告がのるようになった。この年フランス人のクラーイクが横浜ベーカリーを創業したが、これがいまの宇千喜パンの前身である。むろんお得意の大部分は外人であつたが、邦字新聞に広告を出すくらいだから日本人社会にもパンがポツポツ拡まりつつあつたとみるべきであらう。

この年から翌元治元年（一八六四）にかけて京都朝廷を中心とする攘夷熱がたかまり、外人の身辺が危険になつたので、イギリスは元治元年（一八六四）四月いきなり横浜に千五百名の兵隊を揚陸、そのまま居坐つた。フランスもこれに倣つたが無力な幕府は抗議どころかその駐留費まで持たされてしまつた。

しかしこれがために駐留軍の補給が必要になり、西洋野菜や牛肉、牛乳パンなどの納入を受持つ商人も出現、この分野の需要が大きくなりかけていつた。この駐留軍の御用商人だつた中川屋嘉兵衛が、横浜発行の「万国新聞」の慶応三年（一八六七）三月下旬号から次のようなパンの広告を出しはじめたが、これが邦人によるパンの新聞広告のはじまりである。

広告

パン、ビスケット、ポツトル

右之品物私店に御座候間多少に拘らず御求被成下度奉願候

横浜元町一丁目 中川屋嘉兵衛

勿論これは製造販売でなく、異人ベーカリーの取次販売であつたが、彼はこれと同時に牛肉や洋菓の広告も出している。

第四節 兵糧パンブームの到来

開国から明治維新まで国際問題をめぐつての紛争が続発した。めぼしいところをひろつてみると次の通りである。

西 暦	年 代	事 項
一八五八	安政五年	安政仮条約の調印
"	"	安政の大獄
一八六〇	万延 元	桜田門外の変
一八六一	文久 元	露艦の対馬占領事件
一八六二	二	坂下門の変
"	"	生妻事件
"	"	高輪英公使館焼打事件
一八六三	文久 三	長州藩の外船砲撃
"	"	薩英戦争
"	"	攘夷親征の布告
"	"	八月十八日の文久の変
一八六四	元治 元	蛤御門の変
		馬関戦争（列強の下関砲撃）
		第一回長州征伐
一八六六	慶応 二	第二回長州征伐
一八六七	" 三	幕府の大政奉還、王政復古
一八六八	明治 元	鳥羽伏見の戦い
"	"	江戸開城、彰義隊の戦い
"	"	東北征伐
"	"	箱館戦争

こうした内外状勢の緊迫が幕府は勿論諸藩の軍備の強化を促したことはいうまでもない。

幕府がオランダ人の軍事顧問を招いて長崎に海軍伝習所を開設したのは列強と和親条約を締結した安政元年（一八五四）であつたが、これを江戸の築地にうつして強化したのは安政四年（一八五七）のことだつた。それから幕府と討幕諸藩の軍艦買付競争がはじまつたが、幕府がフランスと組んで、同国から士官を派遣してもらい陸軍の訓練をはじめたのも、やはりフランスのあと押して軍艦建造を目的とした横須賀造船所に着工したのも共に慶応元年（一八六五）のことだつた。

こうした幕府のオランダ及びフランスへの接近政策にたいして討幕派の薩、長はイギリスと接近その支援をうけて軍備の強化に奔走したが、そうした内外状勢の緊迫がもたらしたものは兵糧パンのブームであつた。

水戸の藩医柴田方庵が藩の要請によつて長崎のオランダ人からパンとビスケットの製法の伝授をうけたのは安政二年（一八五五）のことだつたが、これが有名な水戸藩の兵糧丸である。これはビタ銭のようにまん中に穴が穿つてあり、それに紐を通して腰にブラ下げる仕組みになつていたが、長州藩や薩摩藩などでも同じような兵糧パンを焼いてこれをいざというときにそなえて貯蔵していた。

長州ではこれを「備急餅」といい、薩州では「蒸餅」と呼んでいたが、何れも生パンと乾パンの合の子みたいなパンであつた。

西洋の科学技術を勇敢に採り入れ、祖国の防衛と近代化に尽した薩摩藩の名君島津斉彬の業績は「島津斉彬言行録」（岩波文庫）にくわしく列挙されているが、その序文の中で牧野伸顕は「（斉彬公は）軍艦、大砲その他軍需品種々の外に一般化学品等の製造も行なわれ、百年前の鹿児島城下近くに工場地帯が劃せられたのである。自分が幼少のときに尚存在せる現場を參觀したる當時を追想するに工場棟を連ね場内各種の機械運転し製鉄所溶鉱爐等の設置あり、職工の働く有様いま式の工場を連想するも異ることなきを記憶す。科学応用は軍需製造に止らず同時にガラス、紡績等の平和産業にも大いに利用せられたり」と当時の盛況を追想している。パンの製造もここで行なわれたが、それはイギリスからやつてきた技術顧問の食

用に供すると共に、兵糧として貯蔵することが主なる目的であつた。

斉彬公言行録を書いたのは公の側近に侍していた市来四郎であつたが、彼はその中で「御軍用のパン」に次の通り言及している。

「御軍用のため蒸餅数千個の製造を命ぜられ、軍用として御試審相成り一二年も貯えおき虫付相成らざるよう製造すべしとの御沙汰にて種々製を異にし御貯え相成りたり。（下略）」と。

これが何時のことか明記してないが、斉彬が襲封したのが嘉永四年（一八五一）であり、逝去したのが安政五年（一八五八）であるから、おそらくペリーの黒船が来航した前後のことだろうと想像される。何れにしても江川担庵亡きものち西洋パン食文化を大規模にとり入れたのはこの島津斉彬であつたが、いままこの御花園製煉所横に外人顧問たちの為につくられた異人屋敷がのこつている。

この薩摩藩と長州藩は維新早々の東北征伐のときにも軍用パンを用いて戦果を挙げているが、島津藩の指導によつてこの兵糧パンを焼いたのは江戸の風月堂であつた。

また文久三年（一八六三）版の「万国新聞」には外人パン屋の次のような広告がのこつている。

広 告

- 一、パン、極上並中品
- 一、ビスケット

右の品航海または戦場等の食料に御用相成り候わば、米芋の如く煮炊の世話なく極めて軽便の品に御座候（略）御入用の方は御高来可被下候

横浜八十七番 ノウロウジ

これで見ると軍用パンの備蓄を怠つていた諸藩が、居留地でパンを買漁つていたようにみえる。何しろこの年五月十日を期して攘夷を決行すべしとの勅諭が幕府に下つており、いよいよいよいよさだといふので横浜市民は右往左往した位であるから、まことに時宜を得た広告ではあるが、外人が平然としてこんな広告を出したのは攘夷などできるものかとかたかきくつて

いたためと思われるのではないだろうか。

第五節 横浜とフランスパン

鎖国日本の扉を叩いて開国に至らしめたのはアメリカ合衆国であった。しかしこうして開国の推進力になったアメリカは、一八六一年（文久元）から六五年（慶応元）にかけての南北戦争のために対外政策の消極化を余儀なくされた。従つて鎖国の扉を開いた日本に対しての進出競争は英、仏露の三大強国によつて進められる仕儀となつたが、そのうちのロシアは一八五三年（嘉永六）から五六年（安政三）にかけてのクリミア戦争のために、東洋のことどころでないという状態となつた。その結果、日本への進出競争は主として英、仏兩國の間で展開されたが、実力においてフランスはイギリスの敵ではなかつたので、次第にフランスの劣勢がめだつてきた。

幕末から明治初頭にかけての対日貿易の七割以上が、イギリスによつて占められたのはこうした事情によるものであるが、イギリスに抜かれたフランスが捲きかえしの工作をはじめたのは元治元年（一八六四）ごろからであつた。この年四月仏公使ベルクルの後任として横浜に上陸したレオン・ロツシュは、特に幕府と結んで政治的にその失地を回復しようとして鋭意画策するところがあつたのである。当時の事情を「近代世界史」の著者中川一男は次の通り分析している。

「仏国公使はレオン・ロツシュといい、元治元年四月着任してより日仏貿易の不振を向上せしめんと鋭意画策し、特に幕府に親善をむすんで同年十二月には幕府が横須賀製鉄所を建設せんとするにあたり、その設計、技師雇傭、機械輸入などを委託せられてフランス式を入れ、翌慶応元年二月には横浜仏語学校を設立して多くの旗本の子弟を教育した。のみならず、さらに仏国よりナポレオン砲等の兵器を輸入して幕府に武器を供給し、また銀行家エラルを日本名譽領事に招聘し、さらに幕府の軍事教官として歩騎砲の三兵種教練のためシャノアヌ、ブリューネ等二十余名を招いた。なお日仏貿易に関しては小栗上野介とともに日仏合同の商會を設立して、

生糸その他の貿易、軍需品の輸入等を企画して一意幕府の支持につとめた」と。

こうしてフランスとねんごろになつた幕府は、慶応元年（一八六五）パリーの万国大博覽會に参加を申込み、十五代將軍慶喜の弟徳川民部大輔昭武を團長とする一団を博覽會に参列せしめたが、一行はナポレオン三世の大歓迎をうけた。明治時代に入つても日仏關係は悪化せず日本の陸軍はフランス陸軍指導の下に建設され、のちドイツの手で育成されたのである。思想的な面をみても明治初期の自由民権運動はフランスの流れを汲むものであつた。

そんなわけで日本近代化の作業はまずフランス文化の輸入からはじまつたのであるが、これは経済や軍事、思想面だけでなく、食物文化の面も同じであつた。この点は横浜のパンの主流となつたのが、ぢかやきの饅頭型（かつおぶし）フランスパンであつたことから立証することができる。そして日本がこのようにまずフランスパンの洗礼をうけた原因は、横須賀及び横濱製鉄所や横浜仏語学校などの仏人技師や教官、それからフランスの軍事教官団などがフランスパンの技術をもちこんだことや、公私の會合にフランスパン、フランスケーキ、フランス料理が盛んに用いられたことなどにも原因がある。明治天皇の宮邸料理もフランス式であつたが、いまもフランスケーキは洋生菓子の王座をほこつてゐる。

しかし明治時代にうつると、フランスパンにかわつてイギリスの型焼パンがめざましい進出をみせる。そのもとを正せばフランス公使ロツシュに對抗して活躍したイギリス公使パークスの努力が奏効したからだと考えられる。初代公使オルコックにかわつたパークスが横濱に赴任したのは、慶応元年（一八六五）の五月であつたが、彼は本国政府の訓令にしたがつて、討幕をもくろむ薩・長などの在野勢力に接近した。こうして幕府はフランス、反幕勢力はイギリスをスポンサーにもつことになつたが、イギリスの支援によつて薩・長側は軍艦や兵器彈薬を次第にそろえていつた。そして薩・長は密航という方式で人材をロンドンに送りこみ、イギリス文化の吸

引にやつきとなつた。こうして薩・長勢力は遂に討幕の宿願を果たし、薩・長中心の天皇政権を確立することになつたが、維新政権はお雇い外人によつて近代化の作業をはじめた。そのお雇い外人の大部分がイギリス人であつたことは勿論であるが、このイギリス人たちはフランスパンにかわるものとしてイギリスパンをもちこんだのである。こうして日本は小型のフランスパンから大型のイギリス流三斤棒山型パンへと移行していつたが、この点については維新以後のパンの部で改めて言及する。

第六節 幕末外遊者の役割

「井の中の蛙大海を知らず」だつた日本人が、西洋文化の輸入を真剣にかんがえるようになったのは、いうまでもなく開国がその直接のキツカケであつた。

吉田松陰がベリーの黒船に便乗して海外留学の宿願を達成しようとしてこれに失敗したことは略年譜記載の通りであるが、それ以後密航または幕府の親善使節または留学生という肩書きで外遊する人が年を追つてふえていつた。そしてこれらの人々はやがてパン食党となつて帰朝、新興日本の指導者として活躍した。その活躍が期せずしてパン食文化の普及という役割を果たすことになつたが、その活躍の象徴が明治初期の日本を風靡した「文明開化」風潮と、欧化風潮はなやかなりし鹿鳴館時代であつたことはいうまでもない。その意味で幕末期の海外との交流についてはここで若干言及しておくてはならない。

幕末期の外遊者略年譜

西 曆	年 号	事 項
一八五一	嘉永 四	土佐の漂民中浜万次郎米艦により琉球に上陸する (江川坦庵の家人となりついで幕府に登用され普請役格となる)

一八五四	安政 一	吉田松陰ベリーの黒船による渡米に失敗捕えられ、これに関連した佐久間象山も禁獄される
一八六〇	万延 一	勝海舟ら威臨丸で太平洋横断渡米に成功する 条約批准のため新見正興等の使節団米艦ポーハタン号で渡米する
一八六一	文久 一	竹内保徳、松平康直等の遣欧使節団英艦オージン号で渡欧する
一八六二	文久 二	幕府オランダに榎本武揚、津田真道、西周らを留学生として派遣する
一八六三	文久 三	長州藩井上馨、伊藤博文ら五名を留学のためロンドンに密航させる
一八六四	元治 一	新島襄箱館を経て国外脱出に成功米国に留学する 薩摩藩寺島宗則、森有礼、五代友厚ら八名を留学のためロンドンに密航させる
一八六六	慶応 二	遣欧使節小出秀実ら出発 幕府中村敬宇、外山正一、菊池大麓等十四名を留学生としてロンドンに送る
一八六七	慶応 三	この年幕府海外留学生をゆるす 遣欧使節団徳川昭武らパリ万国博出席をかねて渡欧

これらの使節に加わつた福沢諭吉や渋沢栄一らの後の活躍はよく知られているが、特に福沢の場合は慶応二年(一八六六)に「西洋事情」を出版し、翌三年(一八六七)には「西洋案内」を出版、続いて「世界国尽」「西洋衣食住」などを出版して西洋パン食文化の紹介に寄与した。また伊藤博文や井上馨が欧化風潮をあふりたてて鹿鳴館時代を招来したことは改めて

いうまでもないが、幕末の外遊者が殆んど例外なくパン食普及の先頭に立つたことは注目に値しよう。

第七節 幕末の長崎のパン

開国から幕末にかけてのパン食普及の拠点は前述の通り横浜であった。それは諸般の政治的事情のために兵庫の開港が慶応三年（一八六七）まで引き延ばされ、新潟の開港が明治元年（一八六八）になり、江戸と大阪の開港が同じく明治元年にようやく実現したからである。

しかし、唯一の鎖国の窓であった長崎と、蝦夷地の大玄関であった箱館では、横浜と同じようにパン食が普及しつづつあつた。ただ、それが日本の食物史の上で大きな役割を果さなかつたのは、その立地条件によるものである。しかしながらそうはいうものの矢張り伝統のある長崎ではパン食史上見逃せないいくつかの事実がある。

その一つは幕末の江川太郎左衛門にはじまる兵糧パンブームである。江川邸ではじめて兵糧パンを焼いたのが長崎の町年寄高島秋帆配下の作太郎であつたこと、水戸の藩医柴田方庵が長崎表のコンブラというオランダ人からパンとビスケットの製法をまなんだことは既に言及済みであるが、全国に拡がつたこの兵糧パンブームの波にのつて、技術指導の先頭に立つたのはすべて長崎表でパン技術を身につけた無名の職人たちであつた。

また明治二年（一八六九）創業の木村屋総本店の最初の技術者は長崎でパンをオランダ人から習つた梅吉という職人であつた。

こうした事實は長崎表の歴史的役割の一端を示すものであるが、その長崎の技術は次第にその影をひそめていつた。それは横浜と東京から新しい技術が拡がっていつたからである。

いま一つ長崎に関連して忘れ得ない事實は、元治元年（一八六四）に長崎居留地に建立された大浦天主堂が果たした役割である。この教会はフランス人によつて建立されたので、土地の人々はフランス寺と呼んでいたが、ここから長崎市内とその周辺にフランスパンが拡がっていつたのである。

パンがヤソ教特にカトリック教と深くつながっていることは既に言及済みであるが、長崎のフランス寺を中心に鎖国によつて失われたパン食が復興の第一歩をふみだしたことは奇しき因縁といわなくてはなるまい。

【紹介】

開国以前のパンについての詳細は下記を参照されたい。

「パン由来記」（東京都千代田区一番町二五 東京書房刊—安達巖著—定価二、五〇〇円）

本書は天文一八年のザビエル来朝にはじまるパンの伝来を、耶蘇教弾圧の苛酷な運命の中に捉えて、開港までのパンの盛衰興亡の跡を詳かにした本邦唯一の文献である。